

食事の情景—食卓を通してみる家族像 “A Family Supper” を読む

開催日 平成 17 年 12 月 5 日

講 師 本 学 山 崎 麻由美
助 教 授

カズオ・イシグロの“A Family Supper”(1982)は親子のある半日を描いた短編である。それぞれ違う土地で暮らしている子ども達(「私」と妹)が久しぶりに鎌倉の父の家に集う。互いの近況を報告しあう内に日が暮れて、父親の手料理を囲んで物語は終わる。淡々と語られる物語だが、そこには読者にもそして時には語り手の「私」にもわからない疑問がいくつか隠されている。そして親子、兄妹が語り合う内に少しずつその疑問の答えが透けて見えてくるのである。

疑問のいくつかを挙げてみる。①「私」は両親との関係が悪くなり渡米して暮らしていたのだが、その不仲の原因は何であったのか。②父親の会社の経営パートナーであった「ワタナベ」の自死の原因は何だったのか。③フグの毒に当たって亡くなった母親の死の真相はどうであったのか。④幼い頃「私」が見た庭の古井戸の幽霊は本当にいたのだろうか。以上四点に対する明らかな答えは作品中にはない。しかし物語を読み進めていく内にその答えがおぼろげながら読者に見えてくる。そしてそれと同時にそれぞれが一つの方向を指していることに気づくのである。

①「私」が両親の下から飛び出したのは武士の子孫であることを誇りに思う父との葛藤のためだった。母は息子を責めていなかったことが妹の口から語られる。②会社がつぶれたことを恥じてワタナベは自死を選んだと父は息子に伝える。しかもワタナベは妻と二人の娘を道連れにした自死であったと妹は話す。同じく会社経営に携わりながら、なぜ父は生き延びて平穏な生活を送りワタナベ一家は死ななければならなかったのだろうか。③父は母の死は「偶然ではないと思う」と息子に告げる。彼は「息子が家を飛び出したことに落胆していた母親の覚悟の死だ」と暗に息子を責める。④「私」の見た古井戸の幽霊は白い着物を着た髪を乱した老婆だった。食事の際「私」は同じような老婆の写真を目に留める。それは死の少し前に撮られた母の写真であった。「私」が暗がりで見えた幽霊は母ではなかったか。母はその時も白い着物を着ていた。「母は自ら死を選んだ」という父親の言葉からも、読者はその当時も母親は古井戸に身を投げる覚悟だったのではないかと連想する。

以上、すべての出来事に父親が強く関与していることがわかる。母やワタナベ一家の死の原因と父親が無関係だったはずはない。父親の強い支配力が邪悪なものであったことは、作品の中で度々使われる“dark”という言葉や暗さを表す表現に象徴されているのである。父親が自ら調理した魚の鍋もフグとの関連から不気味さを感じさせる。タイトルから連想される温かい家族の団らん風景はここにはない。明かりの十分でない薄暗い部屋で会話の途切れがちな食事は、死者の影がつきまとう父親にはふさわしいものだと言えよう。